「フィールドワーク入門」：2 回の講義の記録

周　星

ZHOU Xing

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

ここ十数年間、国際コミュニケーション学部の授業として、「国際フィールドワーク (中国)」を担当してきたと同時に、毎年リレー式の「フィールドワーク入門」についても 2 回の講義を担当してきた。講義の内容は毎年少し微調整もあったが、基本的な構成はフィールドとしての中国を概説するのが 1 回目であり、今までに実施された中国フィールドワークの紹介が 2 回目であった。中国フィールドワークの全体像については『文明 21』第 31 号（2013 年 12 月）に載せられた論文「大学教育における海外フィールドワーク」において、詳しく解説されているので、それを参考にされたい。ここでは、2014 年度の「フィールドワーク入門」2 回の講義の記録を簡単にまとめておきたい。

1 回目：フィールドワークは、なぜ中国を選ぶか

受講生に中国フィールドワークへの参加を呼びかけるため、まず、中国とはどんな国なのか、フィールドワークはなぜ中国を選ぶかをメインにして、講義を展開する。

1、複雑社会としての中国：

13 億 4 千万の人口を抱える世界一の人口大国。一人っ子政策の経緯と問題点。

中国の環境問題や食糧問題：持続可能な発展を目指している中国は、食糧の自給率が日本より高い。現在進行形の都市化プロセス：中国の都市化率は 54％。30 年以上の経済高度成長を経験したが、今現在も途上発展の国である。貧富の格差が激しい。

格差の多重構造：都市と農村、沿岸部と内陸部、漢民族と少数民族。

２、転換期の中国：

社会主義・共産主義のイデオロギーと資本主義の経済＝「社会主義市場経済」

一党独裁の一元社会から多元社会・社会生活の自由化・民主化へ。

「情報公開条例」・経済体制改革の突破と政治体制改革の行き詰り。

文化政策の是正（「革命」から保護へ）：無形文化財の保護運動

経済高度成長期：1980 － 2014

農耕社会から工業化・都市化・情報化社会へ。インターネット・携帯等の普及率。自転車社会から車社会へ。未熟な車社会：交通事故多発。交通のマナーが悪い。駐車場問題。交通ルールの一部は日本とは違う。

「人治」社会から「法治」・「法制国家」へ。法による支配は、まだ完全に確立されていない現状。

階級社会から「市民社会」へ。

転換期において、様々な社会問題が多発。犯罪も多発。

３、歴史と漢字文化の国：

4000 年以上と言われる長い歴史。長くて根深い中央集権制・官僚封建制度の伝統。漢字と漢語の役割：標準語・「普通話」と数多くの方言との関係性。地域性や方言を越える中国文化の力。漢字による文化と漢字によらない文化。

中国フィールドワークのメリット：日本人なら、漢字のみでもある程度のコミュニケーションを取れる。

町の看板など漢字での情報を入手するのが、中国フィールドワークの楽しみでもある。

４、地域性の目立つ中国：

南方と北方：南船北馬・南茶北酒・南米北麺（稲作と麦作）。

異なる生活文化：中国料理＝東は酸っぱい、西は辛い、南は甘い、北は塩辛い。

５、異文化の中国：

儒教の国：中国的価値観＝親孝行。根強い道教：呪術的要素が多い。陰と陽の生活哲学：食生活の原理＝陰と陽（食物の分類）・薬膳と医食同源。風水：陰宅と陽宅（気の理論と実践）。祖先崇拝：陰祖（お墓の祖先・墓祭）と陽祖（祠堂の祖先・祠祭）。

６、中国人：漢民族と少数民族

中国人・中華民族・漢民族。漢民族の分布とサブグループ。

多民族共生の国家：55 の少数民族。チワン族：人口が一番多く、1600 万人。多種多様な民族語が存在するが共通語は漢語。多元性と多様性：春節の例。

農耕世界（漢民族）と遊牧世界（モンゴル族）：肉食と乳食。茶馬貿易や茶馬貿易。

イスラム教の信者＝ムスリムの世界：重商主義（イスラム教）と重農主義（儒教）。

現世利益重視の漢文化と来世利益重視のチベット文化。

最後に、更なる中国事情・中国情報を知るための参考文献を追加する。必要であれば、それらの文献の内容も簡単に紹介する。

2 回目：今まで実施された中国フィールドワーク

2001 － 2004 年、中国フィールドワークは北方中国の陝西省西安と西南中国の雲南省大理・麗江でぞれぞれ 2 回実施された。また、2012 年、上海・蘇州で 5 回目の中国フィー

ルドワークも無事実施された。現地調査の実践や異文化体験を通して、参加学生は中国の社会や文化をより深く理解することができたと同時に、大いに成長したとも言える。これらのフィールドワークを紹介しながら、その経緯、心構え、調査法、コミュニケーションの取り方、レポート・報告書のまとめ方等を学習する。

1、中国フィールドワーク参加者の心構え

「フィールドワーク入門」を受講し、単位を取得する。

中国語が分からなくても中国フィールドワークに参加できる。

最低限のコミュニーション中国語・挨拶用語を少し覚えれば、現場で大いに役立つ。フィールドワークはチームワークであるので、集団行動のルールを守らなければいけない。

事前に中国情報とともに、調査地の情報や資料を収集する。

事前研修で培われた問題意識を現地で検証し、照合する。

地図を持参し、常に居場所を確認する。

好奇心を持って、常に現場のすべてを情報として入手する。

地元の人々との偶然の出会いを楽しむ。常に自分から挨拶する。

大学に補助金を頂いた以上は、レポート・報告書の作成・提出は義務である。

現場で参加者各自の問題意識にあわせた資料収集は、事後研修での口頭発表や報告書の構成に直結する。

中国フィールドワークの実施はチームワークでありながらも、各自のテーマ意識も大事である。参加者の自主的調査や野外学習という自覚が求められる。

２、候補の調査地に関する映像資料を受講生に見せる。

例えば、次年度の中国フィールドは上海･蘇州を調査地の候補とする計画であるから、20 分程度のビデオ資料「上海の年中行事」を放映する。

３、調査方法を中心に参考図書を追加する。

大学生活において、読書がどれほど重要なのかをいくら強調しても、読まない傾向が一般的になる中、中国フィールドワーク参加学生のぞれぞれのテーマ・問題意識に答えられる調査方法の案内書・ガイドブックを推薦する。例えば、

高橋五郎著：『新版　国際社会調査』、農林統計協会、2007 年。

住原則也ほか：『異文化の学びかた・描きかた』、世界思想社、2001 年。

佐藤郁哉著：『フィールドワーク』、新曜社、1999 年。

J.G. クレイン他著、江口信清訳：『人類学フィールドワーク入門』、昭和堂、1994 年。

岩波書店編集部編：『フィールドワークは楽しい』、岩波ジュニア新書、2004 年。

上野和男他編：『新版民俗調査ハンドブック』、吉川弘文館、1997 年。

岩井宏実：『民具調査ハンドブック』、雄山閣、1985 年。

圭室文雄編：『民間信仰調査整理ハンドブック上 理論編』、雄山閣、1987 年。

圭室文雄他編：『民間信仰調査整理ハンドブック下・実際編』、雄山閣、1987 年。

などである。必要であれば、これらの参考図書が推薦された理由も説明する。

4、中国フィールドワークの流れ：参加するための手続き

保護者と相談し、参加同意書に署名して頂く必要がある。

毎年の 11 月中旬ごろに開かれる募集説明会に必ず出席する。

募集説明会において、参加費用の概算および各費目についての説明がある。また、募集説明会に出席する学生を対象として、アンケート調査を行う。回収されたアンケート用紙は参加者の書類審査の根拠となる。必要であれば面接審査もありうる。

参加希望者の熱意、健康状態、集団行動適性、対人関係能力およびコミュニケーション能力の判定を踏まえた上で、派遣学生を選抜する。

12 月の末ごろまで、派遣学生の名簿リストを公表する。

翌年の春学期には中国フィールドワークの「事前研修（ゼミ）」を開講する。派遣学生にとってこれは必修科目である。事前研究では調査地の情報収集･研究テーマの確認･先行研究などを中心に行う。

夏休み（普段は 9 月 1 － 15 日を予定）に中国へ渡航し､フィールドワークを実施する。

秋学期には中国フィールドワークの「事後研修（ゼミ）」を開講する。これも派遣学生にとっては必修科目である。事後研修では調査資料の整理、調査結果の発表、単位レポートのまとめ方等の説明を行う。

最後は、参加学生の全員がレポート・報告書を提出する。これは参加学生の義務である。

年度内（普段 3 月の末までに）､『中国フィールドワーク報告書』を 1 冊纏める。

フィールドワーク報告書を愛知大学図書館、学部のフィールドワーク委員会をはじめとして、大学の関係部署に寄贈する。また、中国の受け入れ側の大学や地元のフィールドワークにも寄贈・還元する。

5、中国フィールドワークの実例

歴年の「中国フィールドワーク報告書」を受講生に回覧させる。

2012 年の中国フィールドワークは、中国の上海･蘇州で実施された。当時の旅行コースは名古屋－上海（市内の繁華街・博物館、中国庭園、街並み、上海大学・江南の水郷古鎮「朱家角」）－蘇州（博物館、市民の自宅訪問、自由市場、世界遺産の古典庭園）－上海（市街地、上海夜景）－名古屋であった。

調査の方法：町歩き・観察・インタビュー・体験・比較・アンケート。フィールドワークは図書館・教室での勉学と違う。また、ホームステイ・観光とも違う。

フィールドワークのキーワード：野良・野外・現場・異文化体験・文化ショック・聞

き取り調査・インタビュー・コミュニケーション・テーマ意識など

「三重」のコミュニケーションが必要である。チームメイト同士間のコミュニケーション、中国人大学生・通訳との間のコミュニケーション、地元のインフォーマント・情報提供者との間のコミュニケーション。

最後は、受け入れ体制や安全対策、危機管理等を解説する。

参考文献

１、周星：「大学教育における海外フィールドワーク」、愛知大学国際コミュニケーション学会編『文明 21』第 31 号、第 41 － 54 頁、2013 年 12 月。
２、愛知大学現代中国学部編『ハンドブック　現代中国』、株式会社あるむ、2003 年。
３、高橋五郎著：『新版　国際社会調査』、農林統計協会、2007 年。
４、住原則也ほか：『異文化の学びかた・描きかた』、世界思想社、2001 年。